原発事故という人類史的惨禍に見舞われた福島こそ、アグロエコロジーの魁の地であるべき

福島大学食農学類教授の金子信博さんにお話を伺いました。原発事故後の対策をどうすべきか―金子先生は、何度もこの言葉を口にされた。「何か役に立ちたい」このポリシーが、金子先生の今と未来を見据えた「行動」に結びついています。未来を切り拓く若者たちへのメッセージは、「Agro Citizens（農的市民）」よ、福島に来たれ！

（聞き手　福島県農民連　根本敬）

原発被災地で役に立ちたい

根本　福島に来られたきっかけは。

金子　東日本大震災、原発事故がきっかけです。研究者というのはたいてい論文を書いて発表したら終わりなんだけども、過酷事故が起きてみんな避難しているんだし、自分の専門分野で何か役に立ちたいと、飯舘や浪江へ。

東和で森の研究をすることになり、落ち葉が分解する過程で、セシウムが落ち葉のほうに移動してくることが確認できた。それが除染に使える。最大10％くらいの効果があったんです。落ち葉だけでなく木のチップでもできます。

根本　その技術はどこかで実現を？

金子　その頃の研究の主流は、「土を強い薬品で洗うと放射性物質が9割減ります」といったもので、私の研究は行政当局から相手にされませんでした。

根本　今日明日に解決するような科学なんて危ないじゃないですか、自然の力を借りながらもうちょっと長い時間をかけて…森の除染をするなら間伐の材が使えるわけだし。先生、どこかでやりませんか。

金子　強い酸なんかで洗ったらもう「土」じゃないでしょ、お金もかかる。未だに私が作った方法が一番環境に負荷を与えずに除染できる方法なんです。

根本　「役に立ちたい」という想いはどこから？

金子　役に立たないことをずっとやってきたからです。ダニの毛の数が、爪の数がなんて議論して、そういう学問も必要なんですけどね。ずっとマイナーで、仲間も少なくて。今になって農業をいかに持続可能なものにするかという世界的な流れになってきて、「土」を中心に考えるのが当たり前に。

土の中にも「生き物」がいる！

根本　学問を志された最大の動機は。

金子　自然や生き物が好きで、中学生の頃から研究者になると言っていたらしいです。高校の時はサルが大好きで、でもサルの研究は体力の世界、「アフリカに1年行って来い」なんて言われて、そこでずっとサルを見ることになる…。

根本　サル？

金子　日本は霊長類の研究で有名だったんです。大学では森林生態、モノの循環を学びました。植物が中心で。やっぱり動物がやりたくて、土の中には「土壌動物」がいると知って、大学院は横浜国大へ行くことに。そこでは「ササラダニ」を研究しました。「トビムシ」を研究していた先輩から、「おまえはダニを」と言われて。私もはじめは「ダニってなに？」って感じでしたよ。

根本　農家は土の中の生き物なんか気にしてないよね。就職は？

金子　島根大学で、造林学を担当しました。はじめのうちは黒板に木を植えているようなものでしたよ。10年ぐらい務めてまた横浜へ。日本はミミズの研究で遅れをとっていたので、国内初の「土壌生態学」という研究室を作りました。分解、養分循環、今で言う炭素を蓄えるとか、世界的なトレンドの中では早いほうでしたね。今その分野が盛んなんです。土のことを理解するのは遠回りではありましたが、不耕起で植物が育つ仕組みなどを調べていましたから、ここ（食農スクールファーム）での取り組みにもつながってきたところです。

根本　今の課題と可能性は。

金子　福島に来たもうひとつの理由があって、福島大学に開設されるのが「農学部」だったからです。もともと有機農業には興味があったし、自分のデータが役に立つ。いろいろな研究者と一緒にやれて、農場もある。ところが、今の農学研究者は幅広く考える人が少なくて、自分の専門だけやってますから、失望でしたね。

根本　自然環境、生態学、未来はそこですよね、うん。農業なんて限られた分野だから。中島みゆきの、なんだっけ「人は空ばかり見てる」。

金子　「地上の星」ね。

根本　農家なんて、天気ばっかり気にして、草の名前も、虫の名前も知らなくて。耕して、薬をかけて、全部殺して。早晩破綻するのが見えているよね。

金子　僕は「足し算の農業」って呼ぶんですけど、みんな何か入れたくなるんですよ。肥料、薬、堆肥…。そうじゃなくて僕は「引き算の農業」を提唱したい。引いていくと日本の自然農のようなやり方になるんですね。その哲学は「なるべくやらない」。

僕は食農スクールファームの準備でも、何もしませんでしたよね。それで根本さんが焦って。

根本　あははは、我々も従来の農業にとらわれてますから、何かやらなきゃって。

金子　わかりますよ。

福島だからこそ有機農業を

根本　大学院設立で苦労されていますが。

金子　「有機」っていうと潰されますからね、それで「アグロエコロジー（農業生態学）」とテーマを広げて。

私は「福島」だから有機農業だと思うんです。セシウムの汚染を受けて、そこで作った農産物を「安全ですよ」って、苦労してきた人たちが農薬まみれの物を作っていては自己矛盾じゃありませんか。

根本　強い農薬で農地の生態系なんかなくなってるし、もう転換期なんだな。

金子　ＡＬＳ（筋萎縮性側索硬化症）の発症率と農薬使用量は明らかな相関があるとか、これからだんだんいろいろなデータが出てきますよ。人体への農薬の影響って必ず後からわかるんです。農薬の安全審査は急性毒性の試験だから。慢性的、複合的な影響はそもそも審査に引っかからないようになっている。

根本　フランス政府はパーキンソン病を農業者の職業病として認め、この病気と農薬との因果関係を確認しています。私も農薬を使わない米を作りましたよ、今年初めて。

金子　みどりの食料システム戦略が策定されてさすがにＪＡも「有機にどう対応するんだ」なんて気にし始めているし。このタイミングでアグロエコロジーを出せば一定の支持は得られる。世界の農業大学では必ずあるのに、日本では単体の授業くらいしか無いんですよ。アグロエコロジーを学びたい人がどっと来て、まず教員を変えていかなきゃならないんです。

根本　学問的にやらなきゃダメだよな、やっぱり。

金子　食農スクールファームの成果の一つは、教えに来てくれる農家さんたちが、ここでなら有機や不耕起を試して失敗してもいいってことなんです。大学でも、学生に自由に畑をやらせようって言ったんですけどね、教員のほうが「虫が出たら困る」とか…。

根本　学生からわくわく感が伝わってこないもんな。農民連で福大にお米を寄付しに行ったんですよ、学生さんが代表で3人ぐらい出てきて。私は「あなたたち食農学類なんだから、お米を作りに来たら？」って言ったんです。もらうのを待ってないで。

金子　日本は第二次大戦の後、相当農村に頼ったんですよ。疎開して食べるものを作ったんです。今だって炊き出しに並ぶ時間があるくらいなら自分で食べるものを作ったら良いんですよ。都市の問題もだいぶいい方向に行くんじゃないかな。

根本　大学院に人を呼び込むキャッチフレーズを。

金子　根本さんが提唱している「Agro citizens―アグロ・シチズン」がまさにそうじゃないですか。

金子信博　かねこ・のぶひろ
農学博士　土壌生態学者
1991年　島根大学農学部助教授、2001年横浜国立大学環境情報研究院教授などを経て、2019年より福島大学食農学類教授。

金子先生が農場長を務める、食農スクールファームの演習場（二本松市永田）にて

農民連フラッシュ flash

憲法９条で平和な未来を

11月13日、第66回日本母親大会in沖縄がオンラインで開催されました。エイサーの踊りの映像で始まった大会には県内200名、全国から1万7千人が参加者しました。弁護士の仲山忠克さんによる「核も基地もない平和な未来を子どもたちに」の講演、沖縄の現状を伝える映像など沖縄が抱える問題を共有し、憲法9条の意味を改めて学ぶ大会となりました。

課題先進地福島で考える ―第３回高校生未来サミット

11月20・21日、第3回高校生未来サミットを開催し、大阪と福島の農業高校、福島大学食農学類の大学生に参加していただきました。津波被害を受けた浪江町請戸小学校やアグロエコロジー実践農場、営農型発電圃場を見学。原発事故の起きた福島で、食・農業、エネルギーについて考える機会となりました。